

3. 歴史的環境

(1) 歴史

1) 旧石器時代～弥生時代（約1万2千年前～3世紀頃）

後期旧石器時代の石器を製作した遺構がJR宇都宮線自治医大駅の東側台地上で確認されているほか、姿川の西岸の後期古墳や下野国分寺・尼寺が造られた台地上でもこれまでの調査で、黒曜石製のナイフ形石器などが出土している。これらのことから、本市でも後期旧石器時代から人々が生活していたことが分かっている。

その後、後期旧石器に続く縄文時代草創期（約1万1千年前）には、薬師寺稻荷台遺跡から爪形文土器が発見されている。この土器が出土した直径2m程度の円柱形の穴の中からは、爪形文土器と共に黒曜石製の石鏃（矢じり）1点のほか、石材や石器を加工した際にできる剥片などが出土している。ただし、縄文時代草創期から前期にかけては、ごく限られた遺跡から土器などが見つかる程度であり、定住した人々は少なかったと考えられている。

縄文時代中期以降になると、徐々に集落が確認されるようになる。神ノ内遺跡や国分寺北遺跡、絹板大六天遺跡、西原南遺跡などから竪穴住居跡をはじめとした遺構が発見されており、市内の広範囲に人々が定住を始めたことが分かっている。

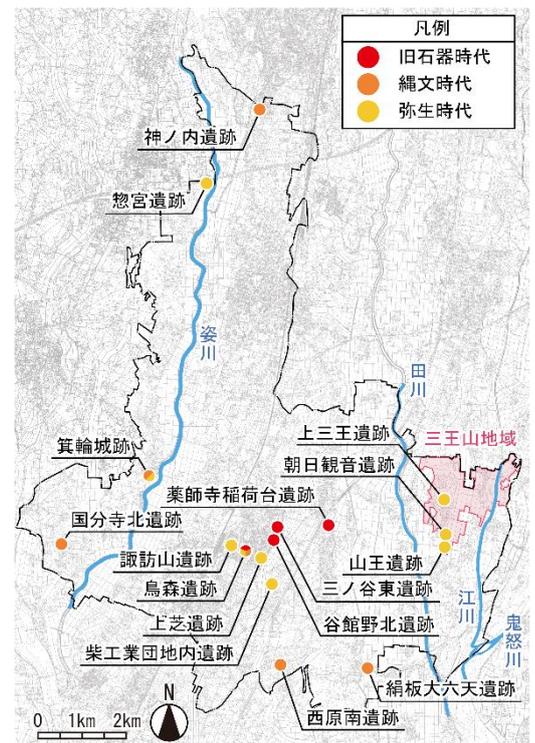
栃木県内では、これまで確認されている弥生時代の遺跡の数は少なく、古墳時代の集落に比べ規模も小さいものが多い。確認されている弥生時代の遺跡の多くは、宇都宮市南部から本市にかけての台地上に多く分布している。特に三王山地区では、20軒を超える後期の竪穴住居跡が確認されている。また、箕輪城跡から見つかった竪穴住居跡からは、現在の群馬県や茨城県、埼玉県などの関東地方の他地域から運び込まれたと考えられる土器が出土している。このことから本市周辺地域では、当時から広範囲（関東圏）において、ヒトとモノの交流があったと考えられている。また、三王山地区の朝日観音遺跡からは北関東地区でも例の少ない鉄剣（全長30cm）が出土している。



爪形文土器（薬師寺稻荷台遺跡出土）



鉄剣（朝日観音遺跡出土）



下野市における旧石器～弥生時代の遺跡

2) 古墳時代（4～7世紀前半）

三王山地区では、4世紀前半頃に、弥生時代後期の集落痕を覆うように、古墳時代前期の方墳や前方後方墳が築造された。中でも三王山南塚古墳群2号墳からは、東海地方の影響を受けた土器類が出土しており、その遺物の年代から北関東地方でも最古級の古墳と考えられている。

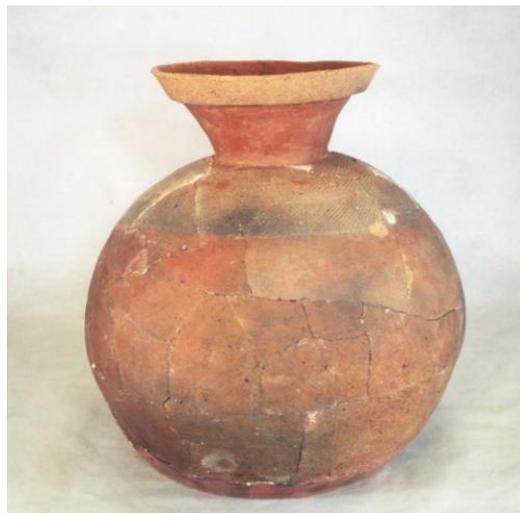
5世紀末から6世紀になると、本市西部を流れる姿川と思川に挟まれた地域に首長墓が造られるようになり、とくに思川と姿川の合流点付近には、摩利支天塚古墳（小山市 国指定の史跡）、琵琶塚古墳（小山市 国指定の史跡）、吾妻古墳（栃木市・壬生町 国指定の史跡）と長さが120mを超える前方後円墳が続けて造られた。

6世紀中葉以降は、思川、姿川、田川流域に古墳が造られるようになり、東部の田川流域では、三王山地区に全長約80mの前方後円墳である39号墳（三王山古墳）をはじめとする古墳が造られた。

また、後に下野薬師寺が建立される薬師寺地区にも、全長80m級の前方後円墳で、凝灰岩を巧みに利用した複室構造の長大な石室を持つ御鷲山古墳が築造された。御鷲山古墳より南に位置する別処山古墳からは、墳丘の規模と比較して豪華な副葬品である銀装大刀、三鈴鏡などが出土している。西部姿川流域の石橋地区には、全長80m級の前方後円墳で、巨大な凝灰岩の板石を使用した石室と墳丘に多数の埴輪群をもつ横塚古墳が築造された。

さらに、東北本線と東北新幹線の工事により消失してしまった下石橋愛宕塚古墳は、全長80m級の帆立貝形古墳で、複数の巨大な凝灰岩を使用した複室構造の石室を持ち、金銅製の馬具類とともに墳丘上に埴輪に替わって並べられたと考えられる須恵器甕類の破片が多数出土している。下野国分寺跡周辺にも、国分寺愛宕塚古墳、丸塚古墳（いずれも県指定の史跡）、山王塚古墳、出土した埴輪等の遺物が国指定の重要文化財に指定されている甲塚古墳など、多くの重要な古墳が現存し、当地域が有力な豪族の支配下にあったことがわかる。

このように、本市周辺には古墳時代後期の大型古墳が多数確認されており、墳丘の1段目が平坦で石室が前方部にあり凝灰岩を使うなどの特徴がみられるこれらの古墳は、下野型古墳と呼称される。



壺型土器（三王山南塚古墳群2号墳出土）



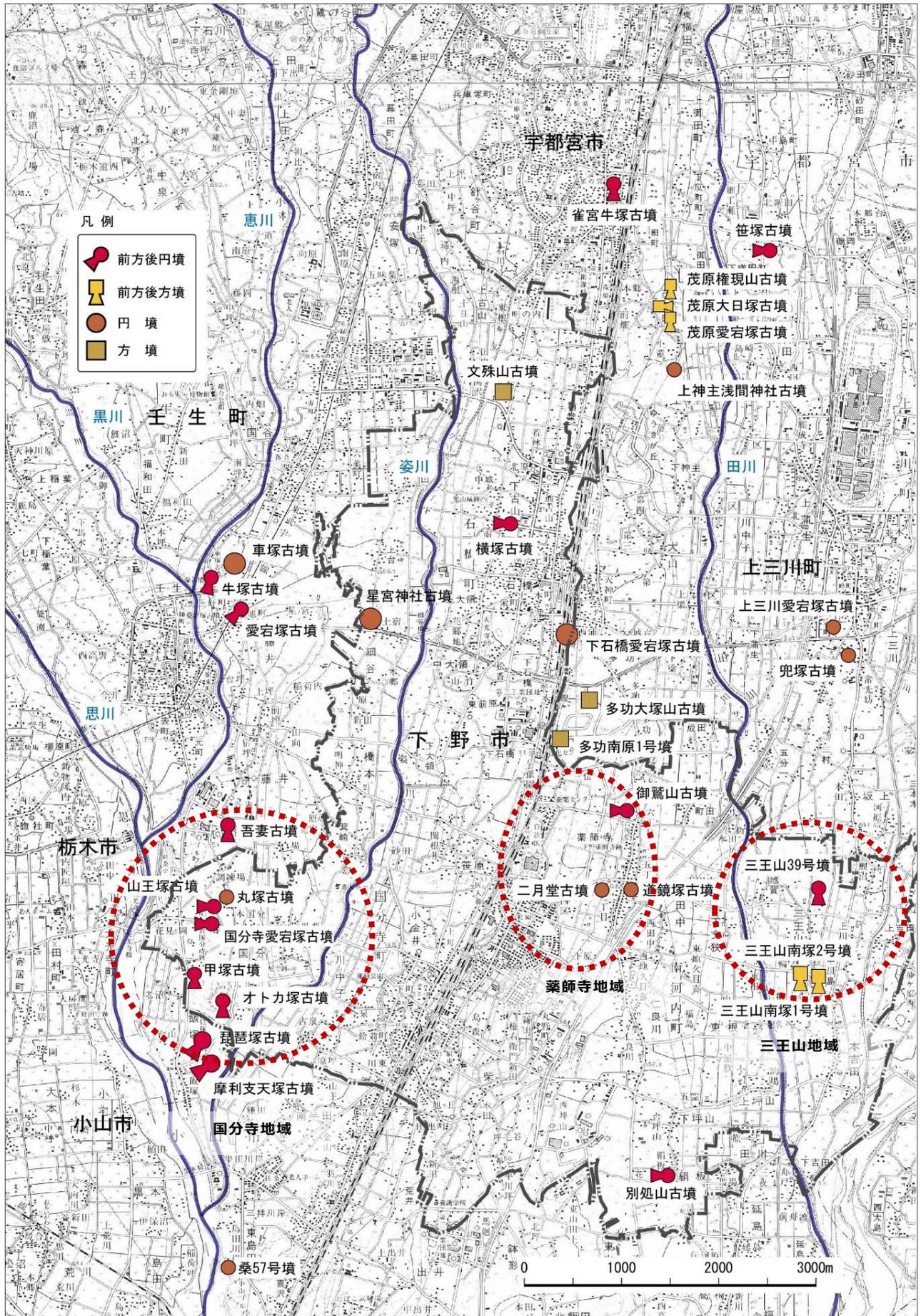
御鷲山古墳



御鷲山古墳石室



透彫金具（下石橋愛宕塚古墳出土）



下野市周辺の主な古墳

<下野市教育委員会『下野市歴史文化基本構想』, 2016.11, p.41>

3) 奈良・平安時代（8～11世紀）

律令期になると、行政区分として全国に五畿七道が整備され、当地は東山道に属するとともに、官道として東山道が敷設された。沿線には国の機関で古代の役所である官衙（西下谷田遺跡、河内郡衙跡の史跡上神主・茂原官衙遺跡、多功遺跡）や寺院等が設置された。

7世紀後半頃には、中央政府で大宝律令の制定にも関わった下毛野朝臣古麻呂一族の本貫地に下野薬師寺が建立されたと考えられている。その後、8世紀前半には現在の県庁にあたる下野国庁（栃木市 国指定の史跡）が置かれ、天平13年（741）の聖武天皇の国分寺建立の詔を受け、8世紀中頃には現在の国分寺地区に下野国分寺・尼寺の造営が進められた。

天平勝宝5年（753）に唐から鑑真を招聘したことで、僧の資格を得るための正式な受戒が可能となり、翌年には東大寺大仏前で聖武上皇以下400人の僧侶が受戒した。その後、筑紫（現在の福岡県）観世音寺と下野薬師寺に戒壇が置かれ、後に「本朝三戒壇」と呼ばれた。東大寺には近畿圏から、観世音寺には西国から、下野薬師寺には東国の僧侶を目指す優秀な人材が集まり、勉学に励んだと考えられている。

また、宇都宮市南部から壬生町、本市域にかけて7世紀後半から8世紀中頃の遺跡から多数の新羅系土器や畿内産土師器が出土している。

下野薬師寺跡に隣接する落内遺跡では、薬師寺創建前の時期から10世紀中頃までの竪穴建物跡が約120軒確認されている。これらの遺構から畿内産土師器や新羅系土器も複数点出土している。当時のことを記録した養老4年（720）の『日本書紀』や延暦16年（797）の『続日本紀』にも数回にわたって東国やこの下野国内に渡来系の人々を配置したことが記されており、土器の出土はこれらの記載を裏付けている。

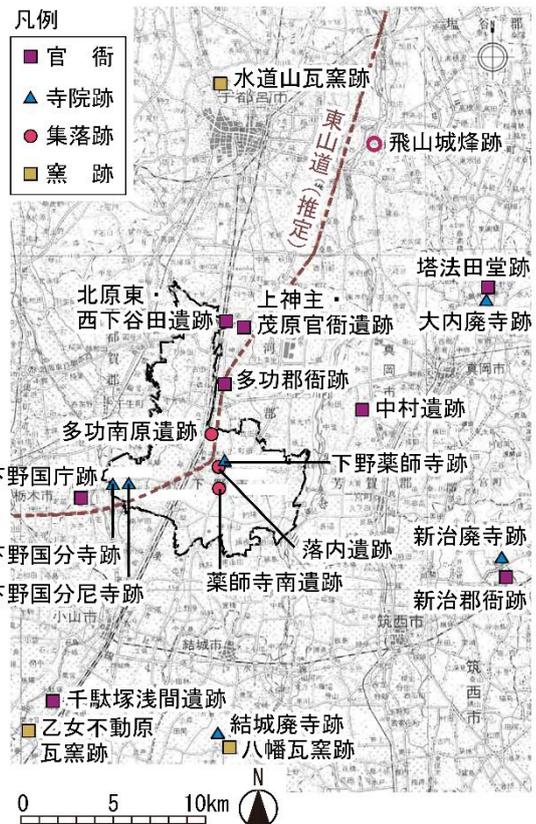
また、下野薬師寺が下野一族の氏寺から官寺になった際にも平城京から工人が派遣された記録があり、畿内産土師器の出土などとの関連性が考えられる。



下野薬師寺（CGによる復元）



新羅系角付土器（落内遺跡出土）



奈良・平安時代の寺院・官衙跡の分布

<下野市教育委員会『下野市歴史文化基本構想』, 2016.11, p.43>

4) 鎌倉時代～戦国時代（12～16世紀）

鎌倉時代から戦国時代、本市は北の宇都宮氏と南の小山氏の勢力範囲の境界であったことから、各地に多くの城館が築かれた。また、中世に整備された街道でうしみちと呼ばれる鎌倉から下野を経由して陸奥を結んでいた奥大道おくだいどうが整備された。うしみちの遺構は、下古館遺跡しもふるだての発掘調査により発見された。

南河内地区みなみかわちちくでは、小山氏一族の支族である薬師寺氏が薬師寺城を築くが、薬師寺氏の動静は15世紀後半以降不明である。石橋地区では、宇都宮氏の南方の拠点となる多功城たこうじょうの支城として、宇都宮一族の児山氏こやまが児山城を築城し、その周囲には複数の小規模の館を配置して防衛ラインを構築した。現在でも土塁と堀の跡が一部残存している箇所や、既に遺構は消失しているが郭内くるわうちなど館跡の関連性を示唆する地名が残されている。最終的に児山城は、宇都宮氏が改易けいいちよう*となる慶長年間（1596～1615）まで存続したとされている。国分寺地区では、鎌倉初期の小山朝政おやまともまさゆすりじょう讓状に「国分寺敷地」と表記されており、現在の下野国分寺跡・国分尼寺跡一帯が、当時は小山氏一族の支配下に置かれていたことがわかる。

箕輪城みのわじょうは、中世後期以降に築城されたと考えられており、東側に姿川を配置した城の構えであることから東方の敵に備えた城の構造であり、宇都宮方か結城くげ・久下田くげた・下館方からの攻撃に対峙する城であった可能性が高い。

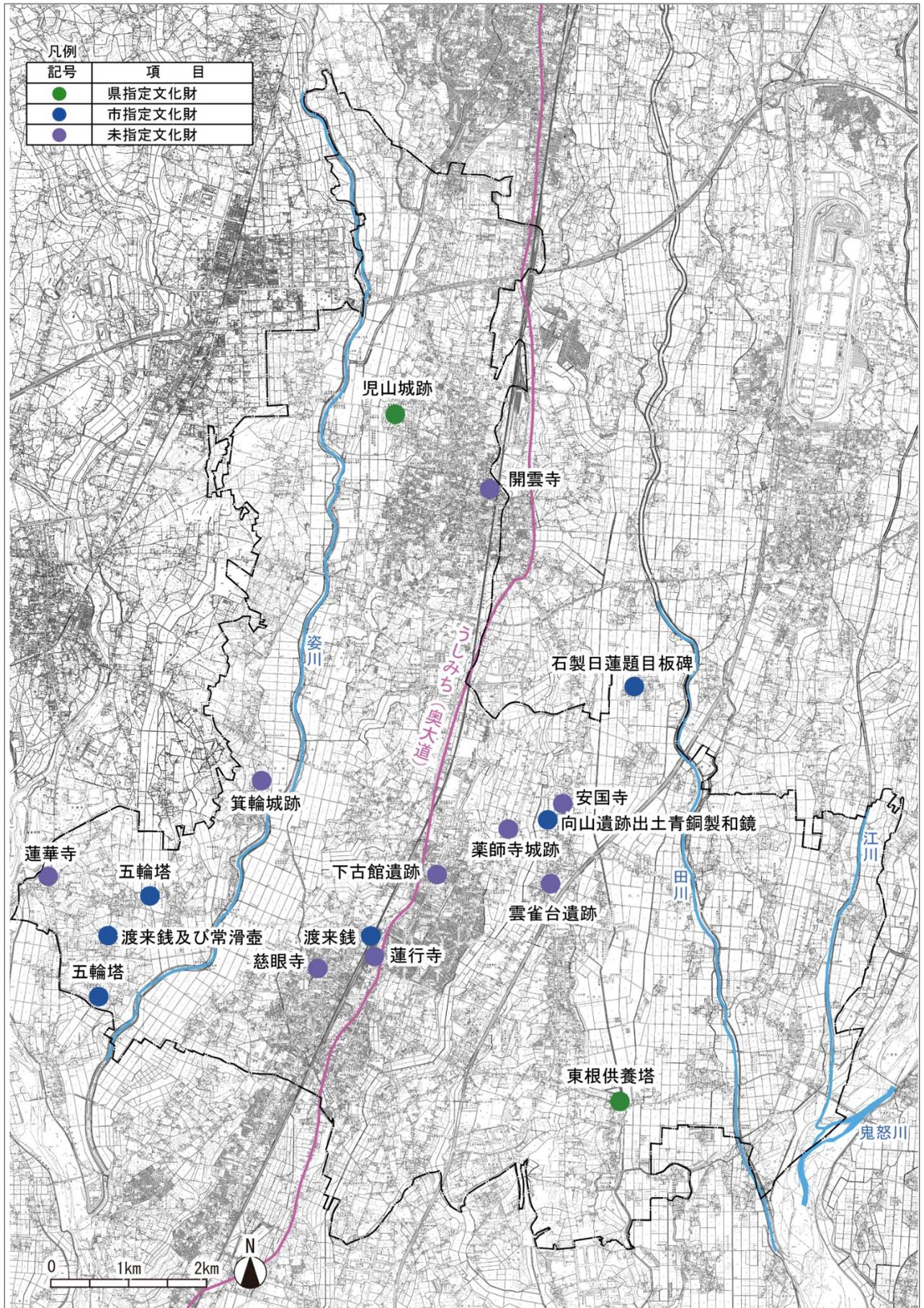
城館以外の中世の遺跡としては、下古館遺跡があり、東西約480m・南北約160m・幅約4mの薬研堀やげんぼりに囲まれ、中央をうしみちが通っている。また、宗教施設さいし、祭祀施設さいし、建物などが堀によって区画された遺構が確認された。これらは宿しゆく・市いちまたは門前市もんぜんいちの跡と考えられ、中世の都市構造を示す貴重な遺跡として評価されている。

このほか、南河内地区には、鎌倉初期の供養塔くようとうとして東根供養塔ひがしねが残されている。この凝灰岩製の石造物は、東根地域を支配した佐伯氏さえきしが、亡き父母の供養のために建てたもので、塔を製作した人物名も刻まれており、渡来系氏族が関わっていたことがわかる。また、国分寺地区の小金井で約16,000枚、国分寺で約12,000枚、上芝遺跡で162枚の渡来銭が見つかっており、埋納銭か備蓄銭かは判然としないが、大量の銭を収集できるだけの勢力基盤があったと考えられている。

南北朝時代あしかがたかうじ、足利尊氏ただよし・直義が討幕に伴う戦の戦死者を弔うために、全国に安国寺りしょうとう・利生塔りしょうとうを設けることとなった際に、下野国では下野薬師寺が選ばれ、暦応2年（1339）に安国寺と改称された。しかし、改称後も一般には薬師寺と呼ばれていた。

本市周辺は、北の宇都宮氏と南の小山氏の勢力の交わる地域であったことから、度々戦が行われた。康暦2年（1380）には裳原もぼら（現在の宇都宮市茂原）で宇都宮基綱うつのみやもとつなと小山義政おやまよしまさが戦っている。天文7年（1538）には宇都宮氏の内紛に伴い、宇都宮氏の重臣である芳賀高経はがたかつねが児山城跡に籠城したほか、永禄元年（1558）には、上杉謙信うえすぎけんしんが下野に侵攻し、多功城を攻め、児山城主である児山兼朝こやまかねともも出陣し上杉勢を退けるが、児山兼朝が討死したとの記録が残されている。戦国末期の北条氏の下野侵攻に伴い元龜2年（1571）北条氏と結城氏が薬師寺地域周辺で戦い、北条方の軍勢により安国寺が焼失する。その後も天正6年（1578）に反北条方（佐竹氏等）が北条方となった壬生氏を攻めるために薬師寺地域に進軍したほか、天正11年（1583）には北条方の壬生義雄みぶよしただけと反北条である宇都宮国綱うつのみやくにつなと結城晴朝が戦い、北条方を撃退するが薬師寺地域一体は焼失したと伝えられている。

※改易：大名・旗本などの所領や居城・陣屋・屋敷などを没収すること。



中世文化財分布図

<下野市教育委員会『下野市歴史文化基本構想』, 2016.11, p.45>

5) 江戸時代（17～18世紀）

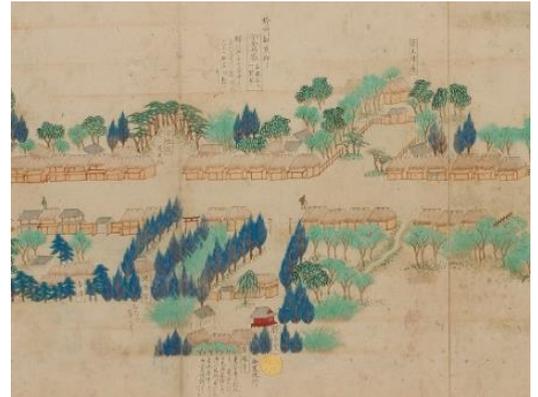
五街道（東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道）は江戸時代に徳川幕府の政策として整備されたが、日光街道は、歴代徳川将軍が初代徳川家康の命日に日光東照宮で行われる大祭に参加する日光社参を契機として整備され、江戸から下野国を経て奥州方面に至る物流の幹線道路としての機能も有していた。これらの街道は将軍や大名をはじめ多くの人々の往来があり、特に将軍の社参の際には10万人を超える大行列となった。

江戸時代には五街道の一つである日光街道と、その脇往還である関宿通多功道（日光東往還）、日光道中壬生通（日光西街道）が現在の市域内を通過していた。

本市域内には、小金井宿と石橋宿が設置され、人・物の盛んな往来を背景に発展した。天保14年（1843）の『日光道中宿村大概帳』によると、石橋宿は旅籠30、家数79、人口414人、小金井宿は旅籠43、家数165、人口767人であった。小金井の慈眼寺・石橋宿の開雲寺は、日光社参の際の将軍の休憩所とされ、それぞれ御殿所が設けられていた。将軍の社参に伴い、街道を行き交う人々や近隣集落から手伝いに集まった人々でにぎわう活気のある宿場であったことが記録されている。なお、慈眼寺には、宿場の男衆が句会を開催していた句額が、また小金井宿内には俳諧碑が残っており、文化レベルが高かったこともわかる。

また、日光街道の整備に伴い、江戸日本橋から22里（約88km）の地点に小金井一里塚が設置された。小金井一里塚は明治以後に日光街道が国道4号となった後も存続し、全国的にも一対となる2基の塚が現存する一里塚は貴重であることから、大正11年（1922）に国指定の史跡となった。なお、23里目の下石橋一里塚も西塚のみであるが現存している。

南河内地区には宿場は存在しなかったが、関宿通多功道が通り、文化2年（1805）刊の『木曾路名所図会』や文化3年（1806）の『五街道分間延絵図及び見取絵図一関宿通多功道絵図』には、当時の安国寺（旧下野薬師寺）周辺の様子が描かれている。これらの絵図から、安国寺周辺は小規模ながら門前町のような佇まいであったことがわかる。寛政年間（1789～1801）以降に、秋田藩の陣屋が置かれた仁良川や、吉田河岸に隣接した吉田村も、街道沿いに建物が建ち並ぶ街並みが形成された集落であった。



天保期の小金井宿
＜日光山道中絵図＞



慈眼寺

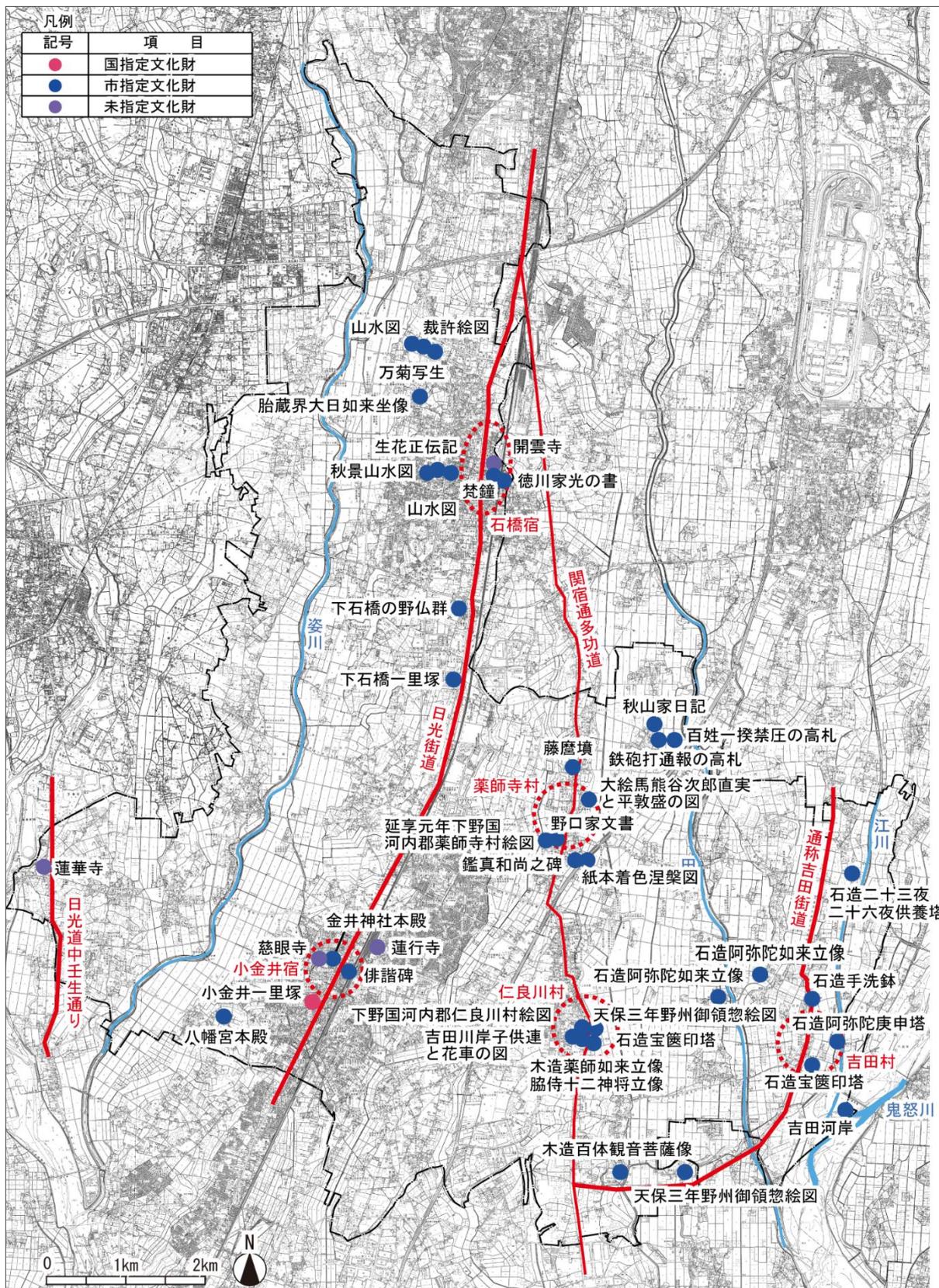


開雲寺



文化期の安国寺周辺
＜木曾路名所図会＞

このように、人・物が往来する街道の後背地として広がる農村では、江戸時代中期より農家の副業として結城紬ゆうきつむぎが盛んに生産されるようになり、江戸時代後期より干瓢かんびょう、養蚕ようさんなどの商品作物の生産が盛んになっていった。



近世文化財分布

<下野市教育委員会『下野市歴史文化基本構想』, 2016.11, p.45>

6) 明治以降（19世紀～）

明治維新後、現在の下野市に編入されている地域は、はいほんちけん 廃藩置県により、も おかけん 真岡県から日光県に属したが、明治6年（1873）に栃木県に編入された。真岡県の時期に真岡県知事事務所が開雲寺敷地内に置かれた。明治22年（1889）の町村制施行後には、村々の合併により吉田村、薬師寺村（南河内地区）、姿村、石橋町（石橋地区）、国分寺村（国分寺地区）が成立し、これが第二次世界大戦後にさらに合併して南河内町、石橋町、国分寺町となり、平成18年（2006）の合併で下野市となった。

明治時代、現在の自治医科大学がある場所は、かんゆう 官有のへいちりん 平地林が広がり周辺住民のさいそうち 採草地として使用されていたが、明治44年（1911）に栃木種馬所が設置され軍馬生産の一翼を担った。その後第一次世界大戦の影響を受け大正13年（1924）に廃止、2年後に畜産技術や農業者の指導機関としてとちぎけんしゅちくじょう 栃木県種畜場が設立された。昭和38年（1963）にとちぎけんちくさんしけんじょう 栃木県畜産試験場へと改組されたが、高度経済成長期の僻地医療政策による昭和47年（1972）の自治医科大学の開学と周辺地域の都市開発に伴いにしなすのちくさんしけんじょう 西那須野畜産試験場に統合移転となった。自治医科大学周辺は大学の開学に伴い、昭和58年（1983）に自治医大駅が開業するとともに、同年から自治医科大学周辺開発事業が施行され、現在の市街地が形成され始めた。

明治時代から昭和初期にかけて、栃木県の干瓢生産が大きく発展を遂げる。栃木県産干瓢の9割は大阪、東京などの県外へ鉄道輸送により移出され、その半分が明治18年

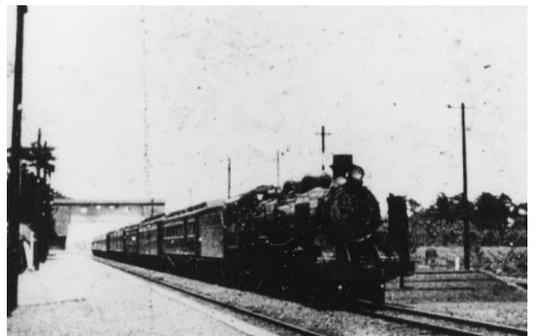
（1885）に開業した石橋駅から運ばれたため、石橋町は干瓢の商取引を行う問屋や仲買商が多く集まった。このことは明治以降の石橋町の発展に大きな影響を及ぼした。江戸時代から石橋宿には馬宿があり、東北本線が宇都宮まで開通した明治18年頃に全国的に知られるようになり、明治38年（1905）に正式に馬市場が開設された。馬市場は昭和18年（1943）、第二次世界大戦の戦況の悪化により閉鎖するが、戦後再開されて家畜市場となった。家畜市場はこうらんき 耕運機の発達により昭和30年代の半ばから馬に代わって牛が中心に取引されるようになり、平成元年（1989）3月6日のせり市を最後に閉場となった。国分寺町は東北線の開通をうけて明治26年（1893）に小金井駅が開業し、はたごや 旅籠屋を中心とした商業から倉庫業や貨物運送業へと変化し、物資輸送の拠点として発展した。また、昭和41年（1966）には、当時の国鉄が小山電車区を小金井に建設、開業し、小金井駅始発、終着の電車が増発された。



現在の自治医科大学周辺（大正14年頃）



石橋家畜市場の様子（昭和30年代）



小金井駅を通過する汽車（昭和10年代）

<国分寺町『図説 国分寺町の歴史』, 2000, p.159>

市内には、数多くの遺跡が残されているが、そのうちの下野薬師寺跡及び下野国分寺跡が大正10年（1921）に栃木県内初の国の史跡として指定された。昭和39年（1964）には、下野国分尼寺跡の発掘調査が始められ、昭和40年（1965）に国の史跡として指定され、史跡整備が実施された。昭和47年（1972）には、国分寺町が史跡・文化財にめぐまれた地域として、文化庁から文化財保護モデル地区として指定された。その後、昭和61年（1986）に下野国分尼寺跡に隣接して栃木県立しもつけ風土記の丘資料館が開館したほか、平成3年（1991）には、資料館に近接して栃木県立埋蔵文化財センターが開所した。これらの施設の設置とともに、下野薬師寺においては、昭和41年（1966）から発掘調査が実施され、平成13年（2001）には史跡下野薬師寺跡ふるさと歴史の広場がオープンし、第1期整備事業が終了した。また下野国分寺跡も発掘調査が実施されるとともに、整備事業を実施し、平成26年（2014）に史跡公園として公開されている。このように、各史跡を中心として整備事業が実施され、文化財を活用したまちづくりが進められてきたが、それらを含めた文化財を総合的に保存・活用するために平成28年（2016）に下野市歴史文化基本構想を策定した。



下野国分寺跡オープン記念式典



整備後の下野国分尼寺跡

<下野市『史跡下野国分尼寺跡第2期保存整備基本計画』, 2012.3, p.19>

7) まとめ

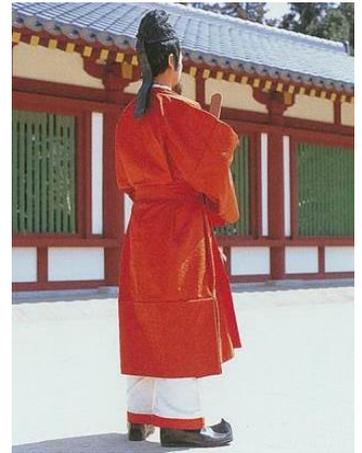
本市は、約1万1千年前の縄文時代草創期にはすでに人が定住しており、古代から現代まで、特徴的な地形により寺院等の施設や集落は河川、沢等に近い台地部のほぼ同じ位置に継承され、各時代の遺構が重なり合って発見されている。また、古墳～奈良・平安時代の文化財とその拠点を結ぶ交通網が各時代に発展し、時代を通じてヒトとモノの交流を生み出していた。本市における地域の空間的役割は、戦いで建造物の焼失などを経験しながらも、連綿と受け継がれてきたといえる。

(2) 関わりのある人物

1) 下毛野朝臣古麻呂 (?~709)

下野の在地豪族出身で中央貴族化した下毛野氏を代表する人物で、7世紀後半から8世紀初めにかけて中央政界で活躍し、下野薬師寺の創建に関わりがあったと考えられている。

古麻呂の名は『日本書紀』の持統3年(689)10月が初出で、すでに中央貴族相当の直広肆の地位にあったとされる。その後、大宝律令の選定に携わった功績から、兵部卿や式部卿を歴任し、和銅2年(709)12月に式部卿大將軍正四位下として逝去した。



イメージ「下毛野朝臣古麻呂」
 <南河内町教育委員会『-解説図録-ピ
 ジュアル下野薬師寺』, 2002, p.28>

2) 弓削の道鏡 (?~772)

河内国若江郡の弓削郷(大阪府八尾市)の出身で、孝謙太上天皇(後に重祚した称徳天皇)の信任を得て天平神護元年(765)には太政大臣禪師となり、翌年には天皇に次ぐ地位である法王にまでのぼりつめた。しかし、宝亀元年(770)8月に称徳天皇が崩御すると後ろ盾を失い、造下野国薬師寺別当として下野国に配流されることとなる。その後、宝亀3年(772)4月に下野の地で死去するが、その葬送については「死するときは庶人を以てこれを葬る」と明記されており、法王までのぼりつめた道鏡も死に際しては一般庶民と同じ扱いがなされた。

現在、下野薬師寺跡南東に所在する龍興寺の境内には道鏡塚と伝えられる塚が残されており、発掘調査から直径約38mの円墳であることが確認されている。

※重祚：退位した天皇が再び即位し、天皇となること。

3) 孝謙天皇 (718~770)

天平勝宝元年(749)から天平宝字2年(758)に在位した史上6人目の女帝で、淳仁天皇に譲位した後に、天平宝字8年(764)に称徳天皇として重祚し神護景雲4年(770)に崩御した。下野薬師寺に配流された道鏡を寵愛し、天皇の位に次ぐ法王にまで任じた。

本市の上大領には明治時代に創建されたとされる孝謙天皇神社が存在している。神社の伝承によれば、配流された道鏡を追って天皇が下野国までやって来たが、会うこともなく亡くなったため、神社付近に葬ったという。

実際には天皇の崩御後に道鏡が下野薬師寺に来ているため事実とは異なるが、神社の近くには孝謙天皇の女官の墓と伝わる塚があることから、来訪した女官が天皇として伝わったものと考えられている。



龍興寺の道鏡塚



孝謙天皇神社

4) 親鸞 (1173~1262)

平安時代末期から鎌倉時代にかけて活躍した僧で、浄土真宗の開祖である。9歳で出家し、比叡山での修行の後、浄土宗の開祖である法然の弟子となった。法然の法難に連座して越後に配流となり、その後罪を許されて常陸・信濃・下野などで布教を行った。貞永年間(1232)に京都に戻り、著述と門弟の指導につとめた。

国分寺にある蓮華寺には大蛇濟度と呼ばれる伝説があり、この伝説の中に、当時布教のために下野国を訪れていた親鸞が、夫への嫉妬により大蛇となってしまった女を成仏させたという話が語り継がれている。この時に天から蓮華の花が降ったため、この土地は花見ヶ丘とも呼ばれている。

境内には親鸞が大蛇の成仏の際に植えたと伝えられる桜と大蛇の遺骸を埋めたといわれる蛇骨塚が残されている。

5) 薬師寺公義 (生没年不詳)

南北朝時代に活躍した武士で、小山氏の流れをくみ、市内の薬師寺地域に本拠を置いたと考えられている(摂津国に本拠を置く橘系の子孫とする説もある)。

室町幕府の奉行人として活躍した後、執事高師直の近臣となり、その守護国である武蔵・上総の代官を勤めた。観応の擾乱で師直が敗れると出家して高野山に入ったが、約半年で還俗した。関東に移った足利直義を攻めるため、宇都宮氏を足利尊氏方に誘い、その勝利に貢献した。観応2年・正平6年(1351)には子の公光等とともに、日光山の堂宇修理の際に棟札を奉納したほか、観応3年・正平7年(1352)には、武蔵国で新田軍と戦った。その後、応安6年・文中2年(1373)には、幕府の使節として鎌倉に下向し、永徳年間(1381~83)に70余歳で没したと考えられている。なお、歌人としても有名で、二条為定に師事し、歌集『元可法師集』を残した。

6) 児山朝定 (生没年不詳)

宇都宮頼綱の四男・多功宗朝の子とされる人物で、児山城(栃木県指定史跡)を築城したと推測されている。

朝定については、史料が乏しく、詳細は不明であるが、弘安6年(1283)に宇都宮城内の一向寺三世一道上人を招いて児永山大通寺(現在の華蔵寺)を建立したともいわれる。



蛇骨塚
 <国分寺町『図説 国分寺町の歴史』,
 2000, p.280>



元可法師集 (神宮文庫所蔵)



児山城跡の堀と土塁

7) 芳賀高経 (1497~1541)

真岡城^{も おかじょう}を本拠とする宇都宮氏の重臣^{てんぶん}で、天文5年(1536)に主君である宇都宮興綱^{う つのみやおきつな}を謀殺^{ぼうさつ}した後、興綱の子俊綱^{としつな}を擁立^{ようりつ}して家督^{か とく}を継がせ、宇都宮家中で大きな勢力を築いた。その後、宇都宮俊綱と対立し、身の危険を感じて天文7年(1538)に児山城^{ろうじょう}に籠城^{ろうじょう}したとの記録が残されている。大きな戦となることなく、小田政治^{おだまさはる}の仲介^{なつかい}によって児山城を出ることとなり、籠城事件は解決するが、天文10年(1541)に宇都宮俊綱により殺害された。



真岡城跡

8) 元寿僧正 (1575~1648)

天正3年(1575)市内田中の野口家に生まれ、14才で出家して受戒し、結城釈迦堂において修業を行った。

その後、慶長8年(1603)には奈良の長谷寺^{は せでら}、更に京都の智積院^{ち しゃくいん}の玄宥^{げん ゆう}、祐宜^{ゆう せい}、日誉^{にち よう}の三代の化主^{け しゅ}に歴事し、その間徳川家康や徳川秀忠に進講を行った。

寛永8年(1631)智積院に移り住み、僧正となり第四世化主となった後、慶安元年(1648)、74才で逝去した。



元寿僧正画像(野口一久蔵)

9) 鳥居忠英 (1665~1716)

江戸時代中期の大名で、能登下村藩主^{お う みみなくち}、近江水口藩主^{しもしけみ}を経て下野壬生藩^ぶの初代藩主となった。

正徳2年(1712)に近江国水口から壬生に国替えとなった。壬生の藩政では干瓢生産を始めるなど殖産興業政策を奨励し、栃木県内最古の藩校である学習館を創設するなどして藩政の基礎を固めた。



鳥居忠英像(常楽寺蔵)

10) 佐藤功一 (1878~1941)

旧小金井町の大越家次男として誕生し、栃木県尋常中学科第5級まで学んだ。その後、東京の錦城中学、仙台の二高を経て、東京帝国大学工科大学建築学科に進み、明治36年(1903)に卒業。学生時代に大工棟梁の佐藤茂八宅に下宿したことが縁となり、佐藤家の養子となった。

卒業後は、三重県技師・宮内庁内匠寮を経て、早稲田大学の建築科創設主任として活躍した。大正7年(1918)には小石川の自宅に建築事務所を開設し、建築設計に全力を注いだ。手がけた作品は、早稲田大学大隈記念講堂や日比谷公会堂など233件にのぼる。作品は、ルネサンス様式を基調とした明快さとロマン主義の調和した特徴を持つ。昭和16年(1941)5月には帝国芸術院会員に推薦されるも、6月に逝去した。



佐藤功一 (栃木県立文書館蔵)

11) 平塚廣義 (1875~1937)

山形県(羽前)新庄出身。東京帝国大学法科政治科に学び、明治35年(1902)内務省に入省、明治38年(1905)福井県事務官、次いで参事官となった。明治40年(1907)には三重県事務官、神奈川県警察部長、愛媛県・新潟県・兵庫県内務部長を歴任した。大正5年(1916)に第17代栃木県知事となり、大正11年(1922)10月からは第21代長崎県知事、翌年には第17代兵庫県知事に着任した。大正14年(1925)には第24代東京府知事、昭和7年(1932)から昭和11年(1936)にかけて、第16代台湾総督府総務長官を務めた。

栃木県知事時代の明治10年(1921)に紫雲山国分寺の釈迦堂の礎石について、国分寺跡(もしくは国分尼寺跡)の礎石であることから永久に保存するよう保存命令を出しており、現在でもこの書類は大切に引き継がれている。これは、大正9年(1920)の内務省地理課で下野国分寺跡などを踏査した柴田常恵の調査結果を受けたものと考えられ、これにより大正10年(1921)に下野国分寺跡は国史跡に指定された。史跡と共に文化財保護の先鞭となる命令であり、本市の文化財保護に貢献した人物といえる。



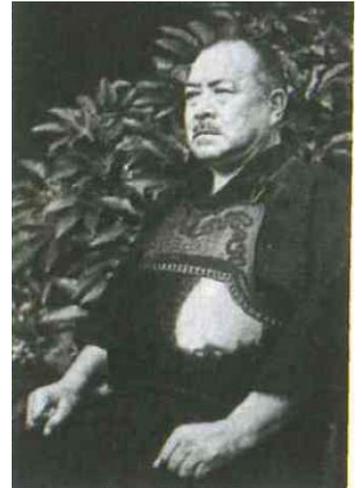
平塚廣義 (栃木県立文書館蔵)

12) 岩瀬銚太郎 (1895~1987)

明治28年(1895)吉田村よしだむらに生まれた剣道範士である。大正3年(1914)修道学院に入門した。剣聖高野佐三郎範士のもとで小野派一刀流を修め、昭和33年(1958)に範士八段を授与された。

昭和38年(1963)に養心館道場ようしんかんを設立し、「栃木県剣道育ての親」といわれ「礼に始まり、礼に終わる」剣道を県下に広め、「剣は心なり 心正しければ 剣また正し 剣を学ぶ者は先ず心を学べ」という教えを守り伝えた。栃木県剣道連盟会長を務めた貢献を称えられ、国から勲五等瑞宝章くんごとうずいほうしょう、県から文化功労賞を受けた。

また、合併前の昭和30年(1955)まで吉田村村長を務め、合併後の南河内村にて昭和34年(1959)まで初代村長に就任した。



岩瀬銚太郎

13) 小平重吉 (1886~1960)

姿村すがたむらに生まれ、宇都宮農学校を卒業後、明治大学予科中退、昭和13年(1938)関東車体株式会社(のち小平重工業株式会社、現小平産業株式会社)を息子久雄とともに設立した。

昭和2年(1927)の栃木県会議員に当選、昭和12年(1937)には、第20回衆議院議員に当選した。また、昭和22年(1947)4月に初代公選栃木県知事に当選し、2期目任期途中の昭和30年(1955)2月に辞任した。

在任中は栃木県総合運動場の建設、五十里ダムいかり、県営川治発電所かわじ、日光いろは坂かすあし、粕足道路きぬがわ・鬼怒川大橋等の建設、宇都宮-日光間全舗装、加藤武男(元三菱銀行頭取)と共に日光カンツリー倶楽部の基を築くなど、土木事業に力を入れ、日光観光の発展に貢献した。

栃木県宇都宮市総合運動公園の南側に小平の銅像がある。



小平重吉